

高知市浦戸湾の干潟における水辺の鳥

楠瀬雄三（エコシステムリサーチ／ひとく地域研究員）・
福井亘（京都府立大学大学院生命環境科学研究科）

はじめに

高知県ではコシヤクシギ、オオジシギ、ホウロクシギなどのシギ類やササゴイ、チュウサギなどのサギ類など、水辺の鳥が絶滅危惧種に指定されている。県下には干潟は少ないが、それでも高知市浦戸湾にはいくつかの干潟が残されている。しかし、これらの干潟における生物相についての情報は少なく鳥類に関するものはみあたらない。本報では浦戸湾の干潟でみられた水辺の鳥について報告する。

方法

調査地を選ぶにあたり、予備調査として干潮時に湾沿岸を踏査し、湾内では比較的地面の露出する面積の広い場所を調べた。その結果、青柳橋、十津、衣ヶ島、瀬戸の4地区を調査地として選んだ（図1）。各地区の干潟面積の算出では、各地区の調査日のうち、最も潮位の低かった日の干潟の範囲を目測し、それを地図上に記入した。その後、室内にて計測した。計測には画像処理ソフトウェア（Adobe社製 Photoshop ver. 6. 0）を用いた。調査範囲は、干潮で露出した地面とその周辺の浅水域とした。調査時期は、干潟を利用する主な水辺の鳥であるシギ・チドリ類を含めるため、渡りの時期である春季と秋季とした。調査時間は、干潮の前後1時間とし、15分ごと計9回、調査範囲にみられた調査対象種の種名と確認個体数を記録した。調査では8倍の双眼鏡と30～60倍の望遠鏡を用いた。調査は単独で行った。調査の対象種は、サギ科、クイナ科、チドリ科、シギ科、セキレイ科、ヒタキ科のうち、中村・中村（1995a, b）において河川、湖沼、干潟、砂浜、海岸などの水辺を主な生息環境とする種とした。

結果

4地区全体では16種、延べ873個体が確認された（表2）。瀬戸では9種延べ58個体（表3）、衣ヶ島では5種延べ12個体（表4）、十津では9種162個体（表5）、青柳橋では11種延べ610個体（表6）が確認された。最も延べ個体数が多かったのはアオサギで、次いでイソシギ、コサギの順であった。高知県レッドリストに記載されている種として準絶滅危惧種（VU）のササゴイが十津と青柳橋で確認された。

おわりに

本報によって、これまでほとんど記録のなかった浦戸湾の干潟における水辺の鳥についての情報が得られた。今後も継続して調査が行われることで各種の個体数の増減が把握できるようになり、高知県における鳥類の保全が進むことを望む。

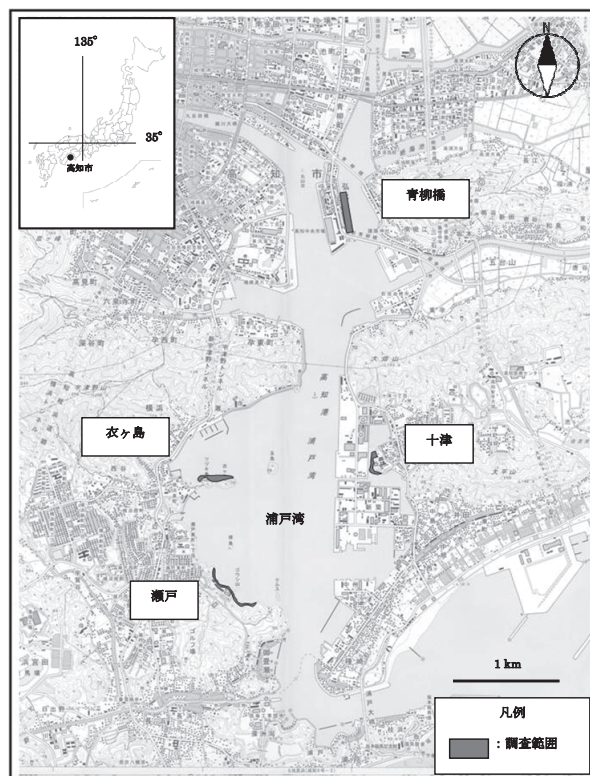


図1 調査地